

## 2012年訪問活動概略

1月14日

(「阪神・淡路大震災17年目の週末ボランティアの会」のため訪問活動は行わず)

1月28日

・70代男性、一人暮らし。兵庫区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅を経てこの復興住宅へ。「終の棲家は此処だね」。近隣の方々のお世話をしたり、1日2時間歩くようにしたりと、お元気そうな模様。東日本大震災について訊いたところ、津波があった分、大変だったろうが、最初の地震への対応は後手に回ったのでは、と思ったとのこと。

・80代女性、一人暮らし。中央区で全壊。同区内の仮設住宅に4年いた後、この復興住宅へ。一昨年、病院で置き引きに遭い、「日本でこんなことがあるなんて考えられない」。以後、鍵交換に1万円かかったりと大変な思いをしたり、表札に名前を書かないなど警戒心を強めたりしている。

・60代女性、東灘区で全壊。西区の仮設住宅で4年過ごす中、東灘区の両親の介護に通い、入退院を繰り返した母の治療費のためお金を使い果たし、弟の援助を受けた。いったん別の仮設住宅に移った後、この復興住宅へ。心臓に異常を抱えながらも隔日で仕事を続けている。「話しを聞いてくれてありがとう」と涙ぐまれた。

・70代男性、一人暮らし。兵庫区で全壊。被災時、文化住宅の2階にいて無事だったが、隣の建物が倒れかかってきて、もたれかかったため、損壊した。ポートアイランドの仮設住宅に4年間いた後、この復興住宅へ。何種類もの薬を間違わず飲むのも大変な模様。タバコが好きで、院内で喫煙できる、ヘビースモーカーの院長がいる病院まで、自転車に乗って行く。暖かな室内に上がらせていただいていたのお話し伺い。

・70代女性、70代夫と2人暮らし。兵庫区で全焼。被災時、文化住宅の2階に住んでいた。着替えなどの準備をする余裕はなく、パジャマ姿、素足のままで脱出、近くの小学校へ避難した。垂水区の仮設住宅で3～4年過ごす。その間も長田区まで靴製造のアルバイトに通っていた。この復興住宅に入居して13年目。年金が減って困っていると、現在も午前中3時間ほど清掃の仕事に。震災時の辛さを思い出して時折涙ぐんだが、ボランティア参加者と被災場所が近いことが判ると、うち解けて元気になっていった。

・80代男性、一人暮らし。東灘区で全壊。被災後妻を亡くし、他の公営住宅を経て、この復興住宅へ入居して3年。ヘルパーに週2回来てもらっている。歩行器に手をかけながら玄関に立ってお話し伺いに応じてくださったが、しんどいとのことで、短時間で切り上げ。

・70代男性、一人暮らし。東灘区で被災。震災後は商売が不振で閉店。数年間勤めた臨時の職も昨2011年で退いた。この10年近く、さまざまな病気の進行で医療費が嵩んでいるので、市に相談したが、年金支給額とのかねあいでは補助はできないと言われた。「迷惑にならぬ余生を送りたいと思います」、「孤独な人々に支援をお願いします」とのメッセージも。〈自身で支援シートに記入〉

2月11日

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。壊れた家に閉じこめられ、やっとのことで這い出た。避難時は水が得られず苦勞した。5回の抽選でやっと当たった北区の仮設住宅で4年過ごした後、この復興住宅へ入居して13年目。若い頃は豆腐屋を営んでいたの、朝早くから仕事をしてきた。白内障・緑内障を患い、片眼はほとんど見えないほど。耳も遠い。高血圧のため、血圧を下げる薬を飲んでいる。立って歩くにも、何かに掴まらなければ危なっかしい状態で、リハビリのため通院を続けている。ヘルパーや孫娘に家事を手伝ってもらっている。年金が少なく生活がたいへん。お部屋に上がらせていただいておりますのお話し伺いに。

・60代女性、夫婦2人暮らし。長田区で全壊。同区内にいた母のもとへいち早く駆けつけ、近所の人のおかげで無事であることを確認、2〜3日一緒に過ごした後、大阪府の弟に委ねたことも。その後も長く介護を続けてきた母も、昨年亡くなり、今は気が抜けたような感じ。介護からの気分転換を図ろうと、習字・絵手紙・俳句などの趣味の集まりに行くようになった。親しい友人も出来たが、年長者がほとんどで、気を遣うところも。東日本大震災の後、繰り返し流される映像を見て、気分が悪くなった。これからは夫と旅行に行きたいと、前向きに考えている様子。

・70代女性、一人暮らし。中央区で被災。この復興住宅に入居して7年。夫を30年前に亡くし、4人の子どもを女手ひとつで育て上げた。その子どもたちが時々来てくれるので寂しいことはない。今は何も言うことはない。身体に悪いところはなく、元気とのこと。

・今寝たばかりで…。ありがとう。ごめんなさい。〈インターホン越しに簡単な応答〉

2月25日

・40代男性、母(60代)と暮らす。須磨区で全壊。家族はみな無事だった。自宅は取り壊すことになり、母宅(中央区で半壊)へ一時身を寄せた。この復興住宅へ入居して4年。自身は隣近所とあいさつする程度だが、母は上や下の階の人ともよく話している。きょうだいも時々訪ねてくるので、母は寂しくないようだ。献血をよくする。何かの役に立っているかも。東日本大震災のことは、気の毒で、たいへん心が痛む。

・70代女性、一人暮らし。長田区で全壊。築数十年の古い借家で被災。襖などが倒れてきた下に埋まり、夫と交替で助けを呼び続けた。垂水区へ避難。避難生活は不自由なかつた。家族とも無事で、母は90歳以上の天寿を全うした。この復興住宅へ入居して13年。夫を此処で亡くし七回忌を迎える。離れて暮らす息子さんからのバースデーカード、長く交流を続けている香川県の高校生からのプレゼントや一緒に撮った写真などを見せてもらった。長く地域で被災者支援に携わっている教員の指導のもと、大学生も訪れている。私たちが参加者全員でおじゃまさせていただきますのお話し伺いと交流に。

・80代男性、一人暮らし。灘区で全壊。「現在のところ私は見守り推進員ボランティアの訪問などを受けており、特に困ったこともありません。国が悪いのか、そういう世の中が悪いのか、私にも悪いところがあったのか。私には何も分かりません。成るようにしか成らないというのが、私の本音なのかもしれません。人に頼らず、自分で行けるところまで行ってみます。どうも有難うございました。」〈自身で支援シートに記入〉

・70代。中央区で全壊。「現在はまだ生活の為仕事をやっていますので今のところは特にないありません。御苦勞様でした。」〈自身で支援シートに記入〉

- ・70代(?)女性。今から医師が往診に来るので待っている。話すのは苦手なので勘弁してほしい。脳梗塞をやったので気をつけている。〈インターホン越しに簡単な応答〉
- ・今、病院から帰ってきたところ。〈インターホン越しに簡単な応答〉

3月10日

・40代女性、一人暮らし。中央区で全壊。同区内の仮設住宅で4年過ごした。数年前に脳梗塞で倒れ、療養施設で2年過ごした。年来の糖尿病もすすみ、半身不随となって、車いす生活。薬はちゃんと飲んでいる。成人・独立した娘(20代)が近くに住んでいるが、あまり訪ねてこない。毎日、交替でヘルパーに来てもらって日常生活を送っており、私たちボランティアが訪問した際も、ヘルパーの助けを得ての応対だった。赤いマニキュアが印象に。

・30代男性。兵庫区で全壊。近くの学校に避難した後、父の会社の寮で避難生活を送り、仮設住宅には入っていない。被災当時は高校生だった。飼っていた小鳥が、いつも早朝に鳴いていたのに、その日だけ鳴かなかったのを不思議に思ったことを覚えている。自分は大丈夫だったが、周囲には、震災のため就職や進学に影響が出た人も。長く派遣でいろいろなところで仕事をしてきた。なかなか採用されないところにもチャレンジして採用されたこともあったことで、前向きに明るくなれた感じ。東日本大震災の後、一時は鬱のようにもなったが、宮城県の知人に何度も電話して無事を確認したり、水を送ったりする支援をした。

・「手が離せないが、元気です。」〈インターホン越しに簡単な応答〉

・「うちの人に聞いたら、何も用事がないとのことなので結構です。」〈インターホン越しに簡単な応答〉

・単車で出かけるところだったので、あいさつ程度のお話し伺い。

3月24日

・60代女性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅で3年7ヶ月過ごした後、この復興住宅へ入居して13年目。夫(60代)は、糖尿病を患っており、体調が悪い。隣近所との付き合いはあまりない。市営住宅であるこの棟には自治会がないが、共益費は家賃とともに支払っている。

・女性、灘区で全壊。インターホンを鳴らすと、すぐに出てきたのは、無邪気な笑顔が可愛い、小さな女の子。続いて、未知の訪問者にたいして無防備にドアを開けたことをたしなめつつ、母親である若い女性が「母(少女の祖母)は元気です」と。短いやりとりの中でも、少しは信頼関係が出来たのか、別れ際に少女がバイバイをしてくれた。

・60代男性、東灘区で全壊。被災以来長年の労苦のためであろうか、体調は思わしくなく、ストレスも高じている模様。そうした現状への憤懣や不安な気持ちを、誰かに向けたかったのであろう。私たちの訪問においても、うかがう内容を正確に理解することも必要だが、そうした気持ちをぶつけてもらって受け止めることが、「心のケア」の基本であり、対話の出発点となるものであることを、改めて学ぶ機会となった。

・50代女性、中央区で全壊。文化住宅で被災し、仮設住宅になかなか当たらず、遠方への避難を余儀なくされた。借金返済のために、大阪府南部の仮設住宅から遠距離通勤しながら、百貨店での催事販売の仕事が続けた。そうした無理がたたったのか、透析が必要とされる寸前まで、腎臓が悪化していた。体調が悪くなったとき、救急車を呼んで待つより早いと、自転車で病院

の救急受付に駆け込んだことも。この日も貧血気味でしんどく、用事を切り上げて帰ってきた。訪問予定のお宅を順次訪ねた際はお留守だったが、帰宅されたのを見て再訪問し、玄関口でのお話し伺いに。しんどいと座り込みながらも、ほとんど初参加のメンバーを前に、30分近くにわたって話し続けた。

・50代男性、一人暮らし。兵庫区で全壊。2階建てアパートの2階に居住、1階は全滅。「加齢の影響が一昨年より出現しました…95年を境に人生観・価値観が全く劇的に変わり、生きてる喜び、実感、将来を見つめる視点が失われました。人との交流が苦手になり…閉じこもりがちになりました…欲しいものや目標がなくなりました。過去17年を振り返ると、避難所時代以外、記憶に残るものはありません…このインターネットの時代、スマホの時代に、インプットがほとんどなくなり、それでも平凡に生きています。震災後の苦労はありません…」<自身で支援シート一面にぎっしり記入>

・60代。「あなたたちのことは、よくわかっています。元気でやっています。」<インターホン越しに簡単なお話し伺い>

4月14日

・50代男性。東灘区で全壊。新聞配達のアルバイトをしながら大学で国際協力を専攻し、日本の企業に就職した。留学生だったときに被災し、近くの小学校に避難した後、ポートアイランドの留学生住宅に4年居た。この復興住宅に入居して13年目。近所とはあいさつ程度の付き合い。日本人はなかなか心を開いてくれないと感じることも。それぞれの国や人々の、いいところを伸ばして、交流していけばいいのではないか。

・70代、夫婦2人暮らし。灘区で全壊。同区内の幼稚園の避難所で8ヶ月、同区内の仮設住宅で4年過ごし、この復興住宅へ。高血圧で寝込んでいる状態で、家の中を歩くときはフラフラしているとのことで、私たちの訪問時も時間をかけて出てこられた。心臓のため入院したことも。夫は神経痛を患っている。たいへん優しくしてくれる。

・70代女性、一人暮らし。長田区で半壊。周囲では大きな被害に見舞われたが、奇跡的に少ない被害で済んだ。地震の揺れでテレビが布団の上に落ちてきたが、暗くて判らず、引っ張ってみたら何か重いなあと感じたくらいだった。地震に気付かず、嘘のような気がするほどで、被災して難儀した人に申し訳ない思いがする。8年前に90代の母を亡くして以来一人暮らし。白内障などで眼を悪くしたため辞めたが、最近まで長く洋裁で身を立ててきており、部屋には使い込まれたミシンが。今回と3年前に訪問した際の「予告チラシ」をあわせて大切に取っているなど、訪問を心待ちにされ、新たな参加者を中心とした顔ぶれで、お部屋に上げていただいております。のお話し伺いに。

・60代女性。「車イス生活です。(せきずいそんしょうしている)」<自身で支援シートに記入>

・「現在はボランティア様を必要とは致しておりません。毎週、訪問りハビリを受け、毎月末、ケアマネジャーの訪問と、翌月のケアプランを行っています。必要時、ヘルパーさんも来てもらっています。」<自身で支援シートに記入>

・90代女性、一人暮らし。中央区で全壊。「地域の方に、助けられ、がんばっています。ボランティア見回り、デイサービス、ショートステイ、ヘルパーさまなどに、介護されています。家族が週末見てくれます。」<自身で支援シートに記入>

4月28日

- ・40代男性、一人暮らし。須磨区で全壊。7年前にこの復興住宅へ。一緒に入居した両親は亡くなり、現在は一人暮らし。夜の仕事をしているとのことで、訪問時は寝ており、起こしてしまっただけで申し訳ないと思ったが、柔らかな物腰で応じてくださった。
- ・80代女性、一人暮らし。中央区で半壊。同区内の仮設住宅に5年程居て、この復興住宅には竣工当初から入居。70歳まで現役で働いた。3年前に夫を亡くし、一人暮らしに。今は膝が悪く、歩行器(手押し車)で買い物に行く。玄関先の通路に出てこられてのお話し伺いに。
- ・50代男性。長田区で半壊。中央区の親類宅に身を寄せ、仮設住宅には入っていない。この復興住宅には、被災後かなり経ってから入居し、10年ほどになる。60歳前で、病気とかはないが、周りは年寄りばかりなので、近所づきあいはあまりない。お休みのところ、ドアを少し開けてお話し伺いに。
- ・80代女性。灘区で被災。「今は血圧が高い、コレステロールが高い等、通院中。今日は用事あり。不在かも知れませんが。元気で何とか買物も行けます。」<自身で支援シートに記入>
- ・80代女性、一人暮らし。灘区で被災。本人は4月に病院で亡くなり、訪問時は遺族らが後片付けに。
- ・女性。「寝ているので…」<インターホン越しにお断りに>
- ・来意を告げると、一旦は開けた扉を閉めてしまった。

5月12日

- ・70代女性、夫婦2人暮らし。灘区で全壊。近くの学校に避難した後、加古川市の仮設住宅へ。仮設住宅にいたときは、駅まで歩いて20分もかかるので、しんどかった。民間賃貸住宅を経て、この復興住宅へは竣工間もなく入居、以来13年に。まあまあ近所づきあいはある。
- ・70代女性、一人暮らし。兵庫区で全壊。出勤途中、高速神戸駅で地震に遭い、陥没したところや周囲から倒れてきそう建物がある道路を歩いて家まで戻った。近くの小学校の避難所に8月まで居た後、ポートアイランドの仮設住宅へ。大規模な仮設住宅で、隣の物音も筒抜けで、とくに暑さ寒さは仮設住宅の方が辛かった。仕事はポートアイランドでして、震災後1月ぐらい休ませてもらった後、再開した。この復興住宅には竣工間もなく入居。住宅の北側には、高速道路が走っているほか、入居当初は貨物列車も走っており、うるさく寝られなくなった。震災前に居たところが静かだっただけに、かなり心身にこたえた。その他は特に身体の具合は悪くない。
- ・80代女性、一人暮らし。灘区で半壊。近くの学校に避難した後半年ほど長男宅に。夫は大工で、自分が手掛けた被災家屋の修理に忙しく、過労のためか、震災3年で亡くなった。この復興住宅に入居して12年ほどになるが、ここにいる人とは、だんだん交流を広げている。最近、足腰が痛い、こけたら誰かの世話にならないといけないので、何とか一人で頑張っている。
- ・70代女性。灘区で全壊。早朝勤務のため4時半に家を出て、震災の時は大阪の勤務先に。すぐに家に戻ろうとしたが、国道2号線を歩いて、8時間以上かかった。大阪に1年居るなどした後、この復興住宅に入居して13年。今では近所の方とコミュニケーションを取って、カラオケを楽しんだりしている。
- ・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。東灘区の公共施設の避難所で4ヶ月過ごした。ポートアイランドの仮設住宅を経て、この復興住宅へは竣工当初から入居。8年前に夫を亡くし、一人

暮らしに。心臓の手術をした後は、ほとんど寝て過ごしていた。「自分で今が一番いいと納得しなくては生きていけませんね」と前向きに。

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。近くの集会所に避難した。高血圧だが、身体に合う薬を飲むようになって、今ではかなり下がってきた。普段はこむら返りがよく起こり、歩きにくくなる。出かける前に自転車を止めて、立ち話をさせていただく。

・「ボランティアご苦労様。元気に過ごして、今日はハイキングに出かけております。」〈自身で支援シートに記入〉

・「全員、健康は良好です。子供(小・中学生)もだんだん慣れてきて、学校へも楽しく通っています。」〈自身で支援シートに記入〉

・70代女性。ドアは開いたが、体調が悪いとのことなので、「今、起きてられない。ごめんなさい。」と、閉められた。

・「ちょっと忙しいので…」〈インターホン越しに短い返答〉

・男性。ドアは開いたが、「もういい」と、閉められた。

5月26日

・70代女性、一人暮らし。中央区で全壊。文化住宅の1階で被災、タンスが倒れてきて、首の骨がずれた上、腰もやられて動けなくなり、どうやって逃げようかと思った。ひとまず車に避難した。神戸市内や西宮市に住んでいる息子たちが、単車や自転車で来てくれたので、心強かったが、所帯を持っている子どもたちに期待し続けるのは難しいと思った。近くの小学校に避難している頃、あちこちで仮設住宅が建ち始めたが、何度申し込んでも当たらなかった。震災から今までずっとリハビリを続けている。白血病ながら土木の仕事の続け、震災時は入院中だった夫は10年ぐらい前に亡くなった。震災のことは聞いてほしくない、あのとき死んでいたらよかったと、今でも思う。

・70代女性、中央区で被災。企業の寮で寮母の仕事をしていて、震災にもそこで遭った。食料などにも困らず、社員たちをみな無事帰すまではと頑張ることが出来た。あの頃は若かったので、不眠不休で頑張れた。震災のおかげで自分は成長したと思う、人の気持ちが解るようになったと、時折涙ぐみながら話した。この復興住宅に入ってから、人との関係がよくなるようにと努力している。若い人には、人に感謝する気持ちをもってと伝えたい。以前の訪問時には話せなかったが、今回は話したいと思えるようになり、話すことが出来た。

・50代男性、長田区で全壊。近くの小学校の避難所がいっぱいで困っていたら、どこかのお坊さんが交渉してくれたおかげで、神社に避難でき、今でも感謝している。冷たいながらおむすびをたくさん戴くことができ、雑炊も振る舞ってもらった。仕事もなくなり頭が真っ白になる中、大阪府に避難先と仕事を見つけて移った。妻が神戸に帰りたいたいというので、ハローワークに行ったら、自分にあった仕事を選べず、いろいろなパートをしていたが、ひどいものだった。夫婦それぞれが糖尿病などの病気を抱えていて、車の運転をひかえ、仕事も余り出来ない中、家事を引き受けている。

・60代女性、灘区で全壊。被災後は実家に避難した。元気です。昼寝の途中だったところを訪問。程なく電話がかかってきたため、お話し伺いを切り上げた。

・60代女性、中央区で被災。区内の小学校に避難し、この復興住宅には入居して13年。「病気なので…」とドアを閉め、短時間のお話し伺いに。

6月9日

・70代男性、夫婦2人暮らし。中央区で半壊。地震の時は、早朝6時に仕事に向かうのにあわせて、朝食の準備をしていた奥さんが、沸かしていた湯を浴びて火傷を負ったが、コタツの下にいて、揺れのために動けず、そばに行ってあげられなかった。西宮市出身の奥さんの身内では犠牲者が出た。ダンプカーを持って運転していたが、高齢で仕事が来なくなり、5年前に辞めた。3年前に訪問してお話を伺ったときのことを覚えていて、今回もきれいに掃除されたお部屋に上げていただいてのお話し伺いに。そのときは元気だった奥さんは、今回はしんどいと、休んでいた。この復興住宅は、高齢者が多いので、活気がなく、静か過ぎる感じだ。参加者の一人と出身地(九州西部)が近いと解ると、話しが話が弾んでいった。

・70代女性、中央区で半壊。山側の小学校に避難したが、港に近い住居が半壊認定となり帰宅した。訪問後程なく電話がかかってきたため、お話し伺いを切り上げたが、元気そうな様子。

6月23日

・70代男性、長田区で全壊。同区内で営んでいたケミカルシューズの工場は全焼、機械に当たった息子は、その後遺症で亡くなった。息子の死でやる気を失った上、費用も膨大になることから工場の再建は断念、借金返済に追われる、マイナスからのスタートになった。タクシー運転手になり、今のタクシー業界はたいへん厳しいが、人間やはり働くのが一番と、今も週2回ハンドルを握る。仮設住宅への入居はやめて借家住まいに。この復興住宅に入居して13年、高層住宅に住んだのは初めて。長田には人情があり、皆で助け合って生きていたが、ここにはそれが無い。

・80代夫婦。訪問時在宅していた奥さんが、杖で身体を支えながら、やっとのことで玄関口へ。しんどそうだったので、お話し伺いを切り上げた。それから程なく、帰宅してきたご主人と出会い、お話を伺った。背筋がまっすぐに伸びた姿は「予科練帰りだから」と、さらに「まだ走れます」と走る格好をして、元気ぶりをアピール。

・70代女性、夫婦2人暮らし。東灘区で被災。自宅近くの阪神高速道路の高架が倒れた。震災まで長く牛乳店を営んでいたが、当時既に牛乳配達の需要が減っていたことに加え、60歳前後の年齢で再建するのは難しいと、再建を断念した。仮設住宅には入らず、この復興住宅には竣工当初から入居。入居間もなく、自転車を階下に置いていたら盗難に遭ったので、家の中に入れている。商店街や最近新たにできたスーパーでまとめ買いした帰りは、自転車に積んで押して帰ってくる人が多い。

・30代女性、中央区で一部損壊。震災の時はまだ十代だった。身体がしんどそうだったので、お話し伺いを早めに切り上げた。

・女性。体調が悪いので…。〈インターホン越しに応答〉

・「せっかくですがお断りします。」〈自身で支援シートに記入〉

・「具合が悪くて出られませんのであしからず。」〈自身で便箋に記入〉

・80代女性、灘区で全壊。「ぼちぼちすごしています。有がとうございます。」〈自身で支援シートに記入〉

7月14日

・80代女性、夫婦2人暮らし。東灘区の自宅を未明に出て、中央区から、ご主人が運転するトラ

ツクの助手席に乗り込んで、大阪方面に向かっていたところ、尼崎市内を走行中、地震に遭った。上下に激しく揺れて怖かった。ラジオで被害の大きさを知る一方、積荷の電機部品は落下も荷崩れもしていなかった。9年前に脳梗塞で倒れ半身不随に。訪問時、片足を引きずるように玄関口へ。ボランティア参加者の一人と年齢が近いと判ると「お元気ですねえ」と、暑さの中の訪問をねぎらっていただく。ご主人は睡眠中とのことで、小声でお話しを伺った。

・70代男性。この復興住宅への、外部からの訪問者に不信を募らせ、警戒を強めてきたことから、友愛訪問活動(一人暮らしの高齢者など、見守りが必要な世帯に、地域住民のボランティアが訪問し、安否確認や話し相手などをする)を行うグループをつくるなど、地域住民自治に積極的に取り組んでいる。暑さの中、まさに入浴しようとしているところに、お話し伺いに応じていただく。

・男性。「忙しいので…。」〈インターホン越しに応答〉

・女性。「今、具体が悪いので…。」〈インターホン越しに応答〉

・女性。「何も話すことはありません。」

・女性。「今寝ていたところなので、ごめんなさい。」〈インターホン越しに応答〉

・男性。玄関のドアを開けていたが「何も言うことはない」と、室内に戻っていった。

・男性。「元気だから結構です。」〈インターホン越しに応答〉

・女性。「何も言うことはありません。結構です。」〈インターホン越しに応答〉

7月28日

・70代女性、一人暮らし。中央区で全壊。仮設住宅は、神戸市内ながら一旦は遠方に行ったが、同区内に移り、4年過ごした。娘をこの復興住宅から嫁がせ、夏休みには孫が遊びに来る。長年家政婦の仕事をしていたが、リウマチのため辞めた。薬を飲んでいるほか、最近人に勧められて、機械で電気をあててみたところ、血流がよくなって元気になり、友人もできて外出が楽しくなった。

・70代女性、一人暮らし。中央区で全壊。今さら男の人に気を遣うのはしんどいので、女友達が一番気楽。一見元気そうだが、2年前にインフルエンザの注射をしたあとに下痢をして以来、痩せて臓器も悪くなってしまった。暑いので、百貨店の食品売場でもらってきた保冷剤を入れて、タオルを首に巻いている。

・70代女性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。近くの小学校に8ヶ月避難した後、ポートアイランドの仮設住宅で4年過ごし、この復興住宅に入居して14年目。1年半前に、夫が脳梗塞で倒れて以来、リハビリに行くのと家事をヘルパーに手伝ってもらっている。ここで骨を埋めるつもり。不足を言ったらきりがないので、これで満足と思うようにしている。

・70代女性、一人暮らし。中央区で全壊。長く立ち仕事をしてきたせいか、5年ぐらい前から足腰が弱くなり、ヘルパーに買い物をしてもらっているが、近くのスーパーがなくなって不便に。一人で寂しくはないと言うが…。

・60代女性、一人暮らし。中央区で被災。子どもを育て上げたのを機に、かなり以前から患っていた病気の治療に専念しようとしたところ、心身の負担が重く、副作用に苦しむことになった。

・10代女性。家族は外出中。震災の時に生まれた。

・男性。元気です。〈インターホン越しに応答〉

・男性。元気になっている。〈インターホン越しに応答〉

- ・男性。元気でいます。〈インターホン越しに応答〉
- ・男性。玄関ドアを開けたまま、室内でお休み。
- ・女性。「忙しいので…。」〈インターホン越しに応答〉
- ・女性。玄関ドアは開いていたが、「結構です。」

8月11日

・30代女性。灘区で全壊。火災も発生したが、近くで焼け止まった。通っていた小学校が避難所になっていたのので、こぢんまりとしたところで授業を受け、体育館での卒業式もなかった。須磨区の仮設住宅を経て、この復興住宅へは、竣工して間もない時期に入居。冬場など六甲おろしのすきま風が吹き込んで寒いので、ドアポストを塞いでいる。隣近所には声かけするようにしている。今特に困っていることはない。

・80代女性、一人暮らし。長田区で全壊。あちこち避難先を移動した後、西区の仮設住宅で1~2年過ごす。この復興住宅と一緒に入居した息子は、夫と同様、糖尿病が悪化して若くして亡くなった。大きく腰が曲がり、歩くのもたいへんな様子で、時間をかけて玄関まで出てきて、お話し伺いに応じてくださった。

・60代女性、一人暮らし。長田区で全壊。「今は勤めていますのでお話し聞いて頂く時間がとれないかも知れませんが、今後お世話になるかと思えます。直後は、どうしようかと思いましたが、主人も一緒でしたので心強かったですが、その年末にひとりになり引越しをくり返しやっとこちらの住宅でおちつきました。仕事が出来なくなった時の事を考えると心細いです。」と、自身で記入した支援シートを、玄関外の廊下まで持ってきて「元気です」と。

・60代女性。「右片側マヒで、不自由を感じますが現在のところ出来るだけ自分で頑張ろうと思っておりますが…具体的には家具の移動の時などは苦勞します。毎週土曜日は遠方まで理学療法に通っており留守をします。」〈自身で支援シートに記入〉

・女性。玄関扉が少し開いていたので声をかけたが、自転車で外出するところだった。奥の方から男性が「結構です」。

- ・男性。「別に言うことはありません。」〈インターホン越しに応答〉
- ・男性。「大丈夫です。」〈インターホン越しに応答〉

8月25日

・80代男性。中央区で半壊。被災後2~3ヶ月娘宅に避難したが、被災した住宅に戻って住み続け、この復興住宅に入居。妻を震災後3ヶ月目に亡くし、息子が心配して時々来てくれる。買い物も自分でして、食事はほとんど、できあいのものを食べる。高血圧のため、2~3度倒れたことがあり、月1度通院するほか、薬は毎日飲んでいる。介護保険が高すぎると思う。足腰が弱っていて、医師からは1日1時間は歩くように言われているが、しんどくて、とてもできない。

・50代女性。兵庫区で被災。仮設住宅で訪問した際のことを覚えていて「当時幼かった子どもも大きくなりました」と言っただけなく、母娘一緒に自転車で外出。夏休みの最後の週末にお出掛けする後ろ姿を見送った。

・10代男性。生まれる前からここにいたらしい。ここが(被災者を優先入居させる公営住宅である)復興住宅であることは、何となく知っている。高齢者が多いが、友達もいるので、淋しくはない。

- ・ 女兒。震災の時のことや今お困りのことなどを伺っているといった、訪問の趣旨を説明したところ「何のことか解らない。」＜インターホン越しに応答＞
- ・ 40代女性。「出かけるところなので、ごめんなさい」と言って、自転車で外出。
- ・ 10代男性。僕は解らないので、話はできない。
- ・ 30代男性。暑さをしのぐべく、玄関扉を開けてお休み。
- ・ 「けっこうです。」＜インターホン越しに応答＞

9月8日

- ・ 70代男性。中央区で半壊。被災後妻は実家に避難したが、自身は六甲アイランドで仕事をしていたため、離れることができず、近くの宗教施設や壊れた自宅で寝泊まりし、さらには壊れた家を賃借したりして、避難所には行かなかった。この復興住宅へ入居して13年半。入居にあたっては、被災者として旧公団と直接契約したので、当初の家賃は安かったが…。長く神戸に住み、70歳まで働いてきた。企業年金に支払い上限が設定されたので、長い間掛けた割には、それほど多くない。かつてはたくさん吸っていたタバコも数年前にやめた。仕事仲間と連れだって遅くまで飲み歩いたが、みな高齢になってきたので、体調を慮って、最近はあまり行かなくなった。1945(昭和20)年の神戸空襲では、3月に経験、6月には自身は疎開したが、妻は経験したとのこと。神戸中心部を襲った1967(昭和42)年の水害では、近くの家や人が流されたのを覚えている。きれいにされたお部屋に上げていただき、さまざまなお話を伺った。
- ・ 70代女性、中央区で一部損壊。液状化現象のため住めなくなったが、全壊・半壊の認定が受けられなかったのと、当時まだ年齢が若かったこともあって、仮設住宅・復興住宅の抽選で優先されずに、後回しにされたため、やっとこの復興住宅に入居して13年。住んでいる部屋は旧公団(現UR都市再生機構)から神戸市が20年契約で借り上げたところで、数年後に期限が迫っているが、市に言っても、お役所仕事で埒が明かない。今さら新しい家に行きたくない。たとえ津波で流されても、死ぬまで此処にいたい。白内障がある他は元気。健康法は近くの温泉に行くこと。友人関係はあるので淋しくはない。
- ・ 70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。西区の仮設住宅で4年過ごしたり、三田市で避難生活を送ったりした後、この復興住宅へ。夫を2年前に亡くした。趣味の多い夫とは、車いすで釣りに出かけてストレス解消するなどしていたこともあって、12年に及んだ看病も苦にならなかったが、それだけに今は心細い。ボランティア参加者の1人と、同じ仮設住宅で過ごした知り合いと判り、夫を亡くしたとき、涙もあまり出なかったのに、こんなに涙が出たのは初めて、と言うほどに涙を流した。
- ・ 70代女性、灘区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅で4年過ごした後、この復興住宅に入居して14年目。訪問したときは夫を亡くして11日目。肝臓ガンが見つかって2ヶ月ほどの、突然の別れだった。息子(40代)にも先立たれていて、娘(最近あまり来てくれない)と2人女だけが残された。心細いが、49日までは元気でいなくてはと思っている。杖をついているのは最近転んだため。近所づきあいはあまりない。
- ・ 40代男性、須磨区で一部損壊。ガスも電気も異常なかったが、妻の家は半壊だった。子どもはこの復興住宅に入居してから生まれた。仕事があるので…と、あまりお話しはできなかった。
- ・ 50代?男性。「今、手が離せないので…」と、ハサミを持って何かを切っている真っ最中に、お返事だけ戴く。

- ・男性。「何を今更話せて言うねん」と、震災のことを話したくない様子。
- ・10代女性。「家族が仕事なので…」〈インターホン越しに応答〉

9月22日

・80代男性、夫婦2人暮らし。東灘区で全壊。自分も負傷せず、妻も倒れかかった仏壇の下の隙間にいて助かったが、近くでは倒壊した建物の下敷きや生き埋めになって、何人も亡くなった。被災後は同区内の息子や身内の家で暮らした後、六甲アイランドの仮設住宅で4年過ごした。周りが皆出て行った後も、最後までいた。初めは、年を取って震災のことは忘れてしまっ…とのことだったが、しばらくして話し出した。妻は寝たり起きたりで、自分が家事いっさいをしている。訪問時は入浴介助するところだった。

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。地震の時は中央区の職場にいて無事だった。外に出て、野営しているような被災者の姿を見て、被害の大きさを知った。何とか30分ほど歩いて帰宅したら、自宅が倒壊していた。その日は一日中外にいて、近くの小学校に避難、迎えに来てくれた大阪の親戚宅へ。おかげで困らなかつた。この部屋は借り上げ復興住宅なので、数年後には出なければならないが、その後は近くの市営住宅に行く予定だ。此処より狭くなるが、掃除も楽になって家賃も少し安くなるようだ。

・90代女性、一人暮らし。東灘区で全壊。この復興住宅に入居する前、六甲アイランドの仮設住宅に3年いた。人工透析のため週3回、4時間半かかるのがしんどい。手がしびれ、足腰も痛く、あまり出歩くことができないので、ヘルパーに買い物頼むが、食事は自分で作る。訪問時、息子(60代)が訪ねてきて、母親を気遣う姿が見られた。

・70代女性。東灘区で全壊。近くの公園に避難した後、仮設住宅で4年過ごし、この復興住宅へ。借り上げ復興住宅の期限のことが一番心配。神戸市からは1回しか説明がなかった。高齢の母もおり、引っ越すのは厳しい。訪問時、息子夫婦が訪ねてきた。

・40代?女性。中央区で被災。今一番の悩みと不安は、借り上げ復興住宅のこと。お年寄りがいる世帯では今更引っ越すのも大変。全ての問題がここに行き着くのでは?

・80代女性、一人暮らし。地震の時は中央区にいた。ポートアイランドの仮設住宅に4年いた。

・50代?女性。「しんどいので…」と、とりわけ震災のことについて話すのが辛そうな様子。

・男性。ちょっと取り込んでいるところ。

10月13日

・80代女性、灘区で一部損壊。被災後は一時、近くの公園で避難生活を送ったが、またもとの借家に戻った。この復興住宅に入居して7~8年。同居している高齢の母は、週3回のデイサービスを楽しみにしている。今特に困っていることはない。人に文句を言わないようにしている。家事は自分がしているが、買い物は近所の人や母にも手伝ってもらうこともあり、助け合って暮らしている。

・50代女性、灘区で全壊。娘(30代)と2人暮らし。近くの小学校に避難した後、同区内の仮設住宅で2~3年過ごす。仮設住宅にいたときは自治会役員をして住民のお世話をしていたことも。この復興住宅に入居して14年近く。入居している部屋は借り上げ復興住宅だが、来2013年にも、この近くの市営住宅に移れることになった。

・60代?女性。一旦はドアを開けて、お話し伺いに応じて下さると思われたが、何故かすぐに

閉められた。

- ・ 80代女性。「須磨から越してきましたが…」〈インターホン越しに応答〉
- ・ 20代男性。神戸市外から引っ越してきたので、何も話すことはない。
- ・ 60代男性。食事中で手が離せない。

10月27日

・ 80代男性。東灘区で全壊。壊れた家の下敷きになって、被災後4時間も埋まっていた。上からかけてくれる声はよく聞こえたのに、下から叫んでも聞こえていなかったようだ。近くで、5人並んで埋まっていたが、1人だけ助かったこともあった。交通が不便な中、大阪まで行って、手や腕に皮膚移植の手術をした。六甲アイランドの仮設住宅には4年以上いた。この復興住宅に入居して14年目。ここに来たばかりの頃は、自転車であちこちに出かけていたが、やがて脳梗塞で倒れ、あちこちがしびれたり、味がよく判らなくなっている。色々なお世話役をしてきて、先日、5名ほどの東京の女子高生が話しを聞きたいとやってきた。老人会も続けており、本当に女性の一人暮らしが多いと感じる。身体が動けば、友愛訪問活動などをもっとやりたい。例年1月17日には東遊園地で「1.17」のロウソクを立てていたが、来年は摩耶埠頭でしてみようと思っている。

・ 80代女性。東灘区で全壊。一人暮らし。六甲アイランドの仮設住宅に4年いて、ようやくこの復興住宅へ。やっとの思いで入れたこの部屋だが、借り上げ復興住宅のため、数年後には出て行かねばならない。URと直接契約して住み続けるのは、年金暮らしでは難しい。今年の抽選に外れ、移転先は決まっていない。年を取って引越するのはたいへん。今かかっている医者に通い続けたいので、遠くには行きたくない。近所で親しくしている人の中には、既に移転先が決まったという人も何人かいる。娘から同居をすすめられているが、婿が定年でずっと居るようになると気を遣いそうだし、一人暮らしの方がが気楽なので…。

・ 女性。中央区で全壊。この復興住宅には父(70代)が住んでいて、自分は時々やってくる。父はポートアイランドの仮設住宅に最後までいて、自治会役員としてお世話をしていたため、この復興住宅に入居して14年目になる今でも、色々な人が相談に訪れている。この部屋は借り上げ復興住宅で、移転先の申込書が届いている。最悪の場合、東灘区の公営住宅に入れるようになっているが、できればここにいたい。

・ 70代男性。灘区で全壊。夫婦共々元気で過ごしている。この復興住宅には早くから入居しているが、近くを通る高速道路や国道がうるさい。買い物は、スーパーも近くて便利。普段からなるべく歩くようにしており、この近くを3~4km歩いている。訪問時にもその準備をして出かける場所であった。生涯学習の色々な講座にも通っている。

・ 70代男性。中央区で半壊。夫婦共々元気で過ごしている。被災した自宅を修理して5年ほど住んだ。喘息のため、発作の時はたいへん。

・ 男性。長田区で全壊。比較的被害が少なかった垂水区に引っ越した。その後引越を繰り返して、やっこの復興住宅へ。

- ・ 70代男性。中央区で半壊。妻・母と3人暮らし。かつては飲食店を営んでいた。
- ・ 30代男性。子どもと暮らしている。母は亡くなった。〈インターホン越しに応答〉
- ・ 女性。「話しはありませんし、話したくありません。」〈インターホン越しに応答〉
- ・ 女性。「忙しいので、すみません」〈インターホン越しに応答〉

- ・男性。「今、食事中なので…」〈インターホン越しに応答〉
- ・男性。「話したくない」
- ・50代男性。「何ですか？」〈インターホン越しに応答〉
- ・30代男性。お休みのところを出てきて「いいです」。

11月10日

・70代男性、夫婦2人暮らし。東灘区で全壊。被災後北区の仮設住宅に最後までいたので、4年間ほど住んだことになる。復興住宅の抽選になかなか当たらなかったため、神戸市から、この部屋をあてがわれたような感じだ。妻が緑内障で、入退院を繰り返している夫が、何でも杖代わりになっているような感じ。何より心配なのは、この部屋が借り上げ復興住宅であるため20年で出て行かなければならないこと。できたらここで最期を迎えたい。玄関扉を半分ほど開けてお話し伺いに応じてくださった。

・60代男性、夫婦2人暮らし。灘区で全壊。「現在通院中(2人)。この住宅は20年の借り上げで、残り7年、その後の事が心配です!(やっと、色んな面でなれたので)」

・10代女性。両親は外出中。学校で震災のことを少しは教わっている。両親から震災のことを詳しく聞いたことはないが、大変だったらしい。

・震災には遭っていない。越してきたばかりなので(特に話すことはない)。

・女性。「人が来ているので…」〈インターホン越しに応答〉

・男性。「結構です。」〈インターホン越しに応答〉 (2軒)

・男性。「先々週、越してきたばかりで…」

11月24日

・70代女性、灘区で全焼。近所一帯は激しく燃え、もらい火で自宅を失った。いったん知人のマンションに行ったが、そこも全壊扱いとなり避難所へ。近くの中学校の音楽室で1年近くを過ごした。同区内の仮設住宅を経て、この復興住宅に入居して15年目。この部屋は借り上げ復興住宅なので、移転先の市営住宅の募集に申し込んだが、抽選に外れた。これからのことを考えると…。ボランティア活動の経験もあり、今もヘルパーとして働いているとのことで、お元気そう。訪問時は、補修工事のため、ベランダに置いている植木を玄関前に移動させていたものを、戻し始めていたところだった。それらの多くは、お世話していた利用者が、自分で育てられなくなったものを引き取ったり形見にもらったりしたもので、中にはご自身より若い人も。このときかぶっていたベレー帽も友人の形見。翌日に予定されていた神戸マラソンの話題になり、ハイタッチをして別れた。

・70代女性、一人暮らし。灘区で全焼。近くの小学校に避難した後、六甲アイランドの仮設住宅へ。出かけるのに六甲ライナーの高い運賃が大変だったが、神戸市はそれにたいして何もしてくれなかった。被災当時はまだ若く優先されなかったため、やっとのことで入ったこの部屋は借り上げ復興住宅。一人暮らしとなった今では、URと直接契約して住み続けるのは大変。市営住宅の移転先を申し込んだが抽選に外れた。空いていて入りやすいところは山の方とか奥の方とかばかりで…。足が不自由で、インターホンが押されてから出てくるまでに時間がかかるので、訪問者は留守だと思って去ってしまい、呼び止めても気付いてくれないことが多い。

・男性。尼崎市で全壊。両親と住んでいたため仮設住宅には入居せず、近くに家を借りた。両

親は亡くなり、12年前に結婚し、この復興住宅へ。入居したばかりの頃、同じ階の人たちと話したが、今ではほとんどが転居してしまった。病気で足が不自由になり、車いすを使用。子どもは学齢期の育ち盛り。神戸市が、借り上げ復興住宅の住人に出て行けと言っているのはよくない、新たに住宅を建設すべきであった、今更期限を突きつけるのは酷い。

・50代女性、夫婦2人暮らし。兵庫区で被災。半壊と判定されたが解体された。被災後すぐに大阪に引っ越した。旧公団と直接契約して、この復興住宅に入居して12年。震災時に友人が亡くなっていた。子どもたちはもう独立したが、子育てで苦労したこともあり、ノイローゼになりそうだったが、愚痴っても仕方ないし、最後はやっぱり自分で決めるしかないと思うようになった。

・30代女性。2年前に入居したので…。震災のことは判らない。〈インターホン越しに応答〉

・女性。(お元気ですか? との問いかけに)「今、家の者が居りませんので…。」〈インターホン越しに応答〉

・男性。「お風呂に入るところです。」

・40代。(出会い頭に)「忙しいので…。」

・女性。「結構です。」〈インターホン越しに応答〉

・女性。(小さな消え入りそうな声で、聞こえにくそうな感じで)「何ですか?」〈インターホン越しに応答〉

・30代女性。「結構です。」〈インターホン越しに応答〉

・男性。(今お困りのことは? との問いかけに)「大丈夫です。」〈インターホン越しに応答〉

・男性。「…。」〈インターホン越しに応答〉

12月8日

・70代女性。夫婦2人暮らし。中央区で全壊。タンスの下敷きになったが、その上にあったものが先に落ちてきたおかげで助かった。多くの人に助けてもらった。4時間埋まっていたため腰を痛めた。長く商店街で営んでいた店も被災し解体した。ポートアイランドの仮設住宅を経て、この復興住宅へ。今はあっちこっち病院通いをしている。しんどそうだったのに加え、寒い中での強風のため、お話し伺いを短めに切り上げた。

・40代男性。母(入院中)と2人暮らし。須磨区で全壊。西区の仮設住宅で3~4年過ごす。もといたところの方が住みやすかった。友達もいたし…。被災当時まだ若かったので仮設住宅や復興住宅の抽選で優遇されず、やっと入ったこの復興住宅は借り上げ復興住宅。あと何年かで行かなければならないはずなのに、神戸市から移転に関する書類が来ていない。

・20代男性。中央区で半壊。避難所や仮設住宅には行かなかった。10年ほど前に母と2人でこの復興住宅に入居。母は元気。

・50代?女性。インターホン越しに応答はあったが、言葉が聞き取りにくく、しばらく待って見たものの、玄関ドアを開けてはもらえなかった。

・50代男性。車いすで出てきたところ、ヘルパーが「スーパーへ行くところです」とのこと。

・「何もありません。ありがとうございます。」〈ご自身で支援シートに記入〉

・「被災者ではないので話すことはない。」〈お電話をいただいた〉

・女性。「今から出かけますので…。」〈インターホン越しに応答〉

- ・40代？女性。「今話すことはない」＜インターホン越しに応答＞
- ・40代女性。「今忙しいので…」＜インターホン越しに応答＞
- ・女性。東灘区で全焼。＜インターホン越しに応答＞
- ・50代。「結構です。」＜インターホン越しに応答＞
- ・50代女性。「人が来ますので…」

12月22日

・70代女性。東灘区で全壊。もとい家はいいところだった。震災さえなければ…と今でも思う。2階建ての2階にいたので助かった。解体時に、押しつぶされた1階のつぶれ方のひどさを、改めて目の当たりにした。近くの中学の避難所から夏になって六甲アイランドの仮設住宅へ。この復興住宅へ入居して14年。長く母と2人暮らしたが、震災後のストレスから認知症になり、自身も介護疲れで、10年前に心筋梗塞で倒れたことも。今は施設に入所している母が、まだ元気だった頃、法被を着て夏祭りを楽しんでいる写真を見せていただきながらのお話し伺いに。借り上げ復興住宅であるため、移転先の申し込みをしたところ、去年は外れたが、今年は当たり、年明け早々に、この近くの市営住宅に移ることに。本当なら此処にずっと居たかったが、引越の手配や準備で頭がいっぱい。

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。北区の仮設住宅を経て、この復興住宅に入居して15年目。子どもたちはもう独立したが、まだずっと勤めに出ている。うんでいるのは借り上げ復興住宅だが、期限まで5年もあるから、まだ大丈夫、ぎりぎりまで居続けたいと思っている。ちょうど帰宅されたところに出会ってのお話し伺いになったが、この後忘年会のため、再び出かけるとのことで、短時間で切り上げた。

・80代男性、一人暮らし。中央区で全壊。大阪府内の娘宅に避難した後この復興住宅へ入居して13年。身体に悪いところはないとのことだが、あまりお元気ではないのだろうか、出てこられるまでにやや時間がかかった。この部屋は借り上げ復興住宅で、2018年まで居られると聞いており、その後も継続して住めることを期待している。簡単に移転させられたらたまらない。

・40代？女性。今年入居したばかり。関東から来たので震災のことはわからない。＜少年とともに＞

- ・女性。この復興住宅には10年前に入居。「結構です」＜インターホン越しに応答＞
- ・60代女性。「何ですか？ よろしいです。」＜インターホン越しに応答＞
- ・30代女性。「今、大掃除中ですので…」＜インターホン越しに応答＞
- ・女性。「今忙しいので…」＜インターホン越しに応答＞
- ・40代男性。「結構です。」＜インターホン越しに応答＞
- ・女性。「結構です。」＜インターホン越しに応答＞
- ・女性。体調が悪く寝ていた。

・50代？女性、一人暮らし。長田区で一部損壊。身体は特に悪いところはない。中央区内に一時住んでいたが、この復興住宅には、前に住んでいた人が引っ越したので、入居することができた。近所づきあいはほとんどなく、話す人もごく限られている。今一番不安なのは家のこと。4年前から毎年移転先の市営住宅の抽選を申し込んでいるが、不便なところには引っ越したくないし…。

・70代女性。足がやや不自由で、毎日病院通いが必要。2年前までは三宮で清掃のボランティアをしていた。毎日のように温浴施設へ半身浴に行っている。友人と喫茶店に行けるのは贅沢だとも。若い頃は赤十字などで仕事をしていた。(借り上げ復興住宅であるため期限が数年後に迫っているが)引越のことは考えたくない。

・女性。「開いているので(どうぞ)。」<一旦はお話し伺いに応じてもらえそうであったが、奥から夫と思われる男性が制止>

・20代?女性。「震災とは関係ないので、あまりよくわからない。」<小さな子どもを連れて応対>

・男性。「…。」<インターホン越しに応答。出てこられるかと待っていたが…>

・女性。「今から出かけますので…。」<インターホン越しに応答>

・「結構です。要りません。」<インターホン越しに応答>

・男性。夜の仕事があるので、寝ていますので…。

・女性。「来客があるので、またこの次に。」

・女性。「何も言うことはありません。」

・「…」<無言のまま再び鍵をかけた>

・女性。「震災に関係ないので…。」

・女性。「忙しいので…。」